

3. 独立自尊

医事万華鏡

偶然、テレビで福澤諭吉の特集番組を視聴し、改めて今のわが国に必要なのは、彼が唱えた「独立自尊」の精神であるように感じます。

ところでこの「独立」の意味は「独り立つ」、すなわち他の束縛や支配を受けない状態を指します。であればこそ自国でいられるのです。一方、独立していない状態とは他に隷属している状態で、自由が拘束されます。まさに米国頼みのわが国戦後の在り様そのものです。

もともとその隷属している状態とは、日本周辺の東アジアにおいても見られます。ただそれが日本と違うのは、長い歴史を通して社会を形成していた思想的・精神的な枠組みそのものが、隷属的であるということです。すなわちそれは「儒教思想」のことです。

儒教思想の何が問題であるかという点、序列化を前提に物事を考える点です。つまり、上に媚びて目下の者を見下す、という、およそ独立した個人とは真逆の精神が固定観念化していることです。こうした観点に立てば、東アジアの外交問題が複雑化し、パワーポリテックスだけで解決で

きない理由も分かります。つまり、儒教思想に根差した「華夷思想」が思考の前提になっていることにより、理屈ではなく偏見に彩られた外交が罷り通ってしまうからです。これは日本と

の国家間合意を反故にした韓国の在り様に如実に表れています。そもそも福澤諭吉が「脱亜入欧」を唱えた理由もまた、東アジアを支配する儒教的な考えの弊害を、自身の経験に照らし合わせて認識していたからなのかもしれません。なるほど儒教的精神は、天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」とは相反する精神と言えましょう。

以上は国家レベルの話でしたが、昨今話題の私立医大・医学部に対する文科省の介入もまた、メディアの尻馬に乗って自由を奪おうとする行為に他なりません。自由裁量の下で、独立した法人として経営努力を重ねてきた大学の運営の在り方を侵害する以外の何物でもありません。

今からおよそ150年前に、福澤諭吉は独立した自由なものの士が形成する社会の到来を夢見、その成就のために社会を変革すべく努力を重ねてきました。しかし今の日本は、彼が目指してきた課題を未だ解決できていないようです。隷属する精神を植え付けられてきた戦後体制から独立する道を選ぶか、隷属したままの状態を選ぶかで、日本の未来は変わります。依存や寄生を良しとする怠惰な心を捨て、誰もが主体的に日本を立て直すという気概を持つことが、今まさに求められているのではないのでしょうか。(JMS主幹・野村元久)

